

第二章 初期図書館

一 文庫と大学部書館

福沢は外国の学校を見てその施設の移植に力めたことは事実である。先づ金のかからないことはすぐ実行している。例えば学校の運動施設などは慶應四年当初の新銭座の塾にも、運動場と唱える空間を持ち、ブランコやシーソーがあり、ダンベルなどもあった。ところが図書館となると簡単にはいかない。私学の資金という厚い壁があった。しかし福沢の頭には教科書と字書のみの図書室には満足しないで、本格的な図書館たらしめようとする考えは常にあったようである。時に応じた書館の充実などはそれを物語る。

明治十年東京大学の開校式に福沢は講演を頼まれて出かけて行って、その施設を見た。それが動機か或は和歌山県新宮の元大名水野家が旧藩の蔵書を寄附しようと申し出たのが発端か、どちらかは判明しないが、その蔵書を中心に本格的な図書館建設に乗り出したことがあった。それは月波楼のような部屋の一隅ではなく、明治八年建てられた演説館の控室のすぐ脇に、木造の家を建て、図書を納めてそれを「文庫」若くは「書籍庫」と呼び、係は八田小雲と定められた。明治十二年には出来ていたと見え、その年の二月三日英国の下院議員サー・エドワード・リードが海軍卿川村純義と共に来校した時、すでに観覧させている。四月頃にはかなり整頓され、貸出規則は小幡篤次郎と加藤政之

助が受持ち、目録は鎌田栄吉、阿部泰蔵、それに小幡も加わって作った。鎌田は目録作成の苦心を思い出として語っている。「その書物のカタログを作るのが又面白い。そのカタログの作り方が中々システムチックで仮名でいろは順か何かで引けるようにする。それで阿部さん、小幡さん、私共も参加してやりました。そうすると棚橋さんというお婆さんがあるでしょう。あの旦那さんは盲目ですが非常な国学者です。又あのお婆さんも偉い人で今の幼稚園の在るところの小さい家に居て、竹橋女学校というのに教えに行って居ました。そこで棚橋先生を呼んで仮名遣を聴くのです。箒というのは「はうき」ですか、「ほうき」ですかというと、いやあれは「ははき」が本当ですというような工合でした。」棚橋のお婆さんは東京女子学院を創立した絢子女史で、福沢が旧大名小笠原家のお姫様の教育を頼まれたので、わざわざ招聘して塾内に住んで貰っていたのである。

こうして苦勞した目録も五月十四日には八、九分まで出来た。塾内の人が勝手に感想を記すことの出来た「道聴途説」という帳面に「随分面倒ノ業ナリシトノ趣、マヅマヅ目出シ々々々。或人ノコジツケナリトヨシ左ニ

目録編次始奏功 数旬勞苦豈何空

試尋児某書存否 笑対吹煙一服中」

とある。また同書の欄外にはそれを野次って

「転結サツパリ分ラヌ、ドウセ分ラヌナラ分ラヌナリニ寧ロ斯クコジツケタラハ如何

請看無学文盲輩モ千万巻書ヲ弄バン掌中」

塾内の多数の人が苦勞して作った文庫も継続することが出来なかった。その原因は資金であらう。明治十二年から

十三年にかけては西南戦争の影響で学生が激減し、義塾財政の窮迫はどん底に落ちた。頭を下げることの嫌いな福沢も政治家や諸名士の間をかけずり廻って、義塾存続の資金援助を乞うた。十二年末には教員の給料を三分の一に減じてもなお足りず、医学所を廃止したり、出版局を身売りしたりして、四苦八苦であったから、文庫の中止も止むを得なかったことであろう。かてて加えて文庫の面倒さ加減も福沢の嫌気を速めたかも知れない。明治十年四月入塾して、その頃、郷里和歌山に帰っていた念誓寺の住職南道亮が図書館建設の相談を持ちかけて来たのに対して、福沢は手紙で

「陳は書籍館設立の義、至極の思召立、世に益あるべきは固より弁を俟たず、唯々困難は其仕組にあるのみ、既に当塾にても或華族より和漢の書幾万巻を預り、此節こそ漸く其目錄等も整頓いたし候位の仕合、其際には損じあり、紛失あり、借りて返さざるあり、千種万様の面倒筆紙に記し難し、併し夫れとても真実之を担任する人あれば必ずしも六ヶ敷にあらず、其人を得るは金にあり、此度思召立に付、若し富て仁ある人が多少の資金を投じて之を助成するあらば、急度首尾能参り可申、尚目錄の仕組等も数月前本塾にて工夫いたし候ものも有之、是も無資本にて未だ十分には無御座候得共、御入用も候はば大意写取り差上候様為致可申存候」

図書館の仕事の意外に金がいること、貸して返さぬ不快さ、面倒さを福沢は仔細に述べている。手紙は九月廿七日の日付であるから、この頃文庫はもう開いていたと思われる。こうして福沢が折角作った文庫も中止された。図書の一部はその頃出来た社交クラブ「交詢社」に移された。「交詢雑誌」明治十三年二月第十七号付録にその書目がある。新聞雑誌報告規則之部、書籍之部と地図之部の三項目に別れ、項目の中も種類別に細分され、細分の中はいろは順に配列されている。恐らく鎌田らの苦心の跡を幾分偲はせるものと思われる。図書の他の部分は義塾書館に入っただ

あろう。明治十三年の書籍出納の規則に、課業の書の他に「漢籍、訳書」の字が初めて見えるのはそれを語るものといえよう。

文庫を担当した八田小雲は塾出身でなく、福沢と同じ中津藩士で、幕府崩壊後も本国に帰ることなく、東京にとどまって福沢を助けた。ちょうどその頃、福沢は出版業もやっていたので、職人の監督に八田を使った。八田は福沢より十歳も年長で、版下も書き、また下絵も描ける小器用な人であったので重宝がられ、三田に移って出版局が出来たときも、朝吹英二主任の下で出版の監督、売捌きなどに従った。また人物も堅いので信用され、三田校舎の普請のときの大工への支払や、福沢留守の時の役所との交渉の仕事などまかされていた。明治十二年の文庫設立の時には住居を書籍庫の脇に新しく建てて貰って、老余の身をこれに専心するつもりであった。八田は十七年四月廿日歿した。「八田小雲翁物故したり。年六十一歳、病症は肺炎と申す事なり」は福沢からアメリカ留学中の息子一太郎に宛てた消息の一節で、福沢一家から親生まれ、交際されていた老人である。貸出規則や目録を作った人達は後に皆有名になった。小幡・鎌田は後ち塾長になり、加藤は政治家、阿部は保険業の創始者として著名である。加藤は塾を出たてであったが、外の人々は教員などの経験を十分に積んだ老練者であるから、文庫設立に対しての義塾の力の入れようがわかるというものである。

次の図書館設立には福沢が前より一層の力こぶを入れ、そして数年続いた。それは明治二十三年一月設立された大文学部の書館であって、この書の冒頭に鎌田塾長が図書館の起源としたものである。明治初期の英学校が次々に姿を消し、専門学校が教育界の主流にとって代りつつあったことは前述した。福沢もいつまでも古い教授法を続けてはいら



大学部玄関

れない。そこで慶應義塾にも大学部を設け、文学科、理財学科、法律学科の三科を置き、主任教師として米国から若手俊英の士を招いた。文にW・Sリスカム、理財にG・ドロップパス、法にJ・Hウイグモアであり、刷新を期に小泉信吉を大蔵省から呼び迎えて新塾長とした。学生は文二十名、理三十名、法九名の少数ではあったが、当時日本で大学と称するものは官立の帝国大学しかなく、従って法令に則るものではなかったにせよ、義塾のそれは帝国大学に次ぐ、私立最初の総合大学の発足であったといえる。

しかしこの日本最初の私立大学部の設備はというと、旧来の島原屋敷の一隅であって頗る貧弱なものであった。そしてその一隅に図書室が設けられた。そして図書室充実のための書籍代は二十二年に七百三十三円九十二銭五厘支払われ、翌二十三年から年五十円宛四カ年継続して支出されることが評議員会で決定され

た。大学部とその図書室との様子を当時の学生鈴木治郎の回想によって蘇らせる。「其の校舎は粗末な木造で、現在の商工学校（注・今の南校舎）の所にあつて、本塾とは離れて居て、教室は僅かに三つ、教員室が一つ、図書室が一つ丈で、田舎の小学校分教場の様であつた」という。それを一層詳しく、川合貞一が間取りまで述べている。「校舎は今日の商工学校からその前の辺の処にあつたが、旧島原藩の下屋敷の建物を利用したものであつて、敷台付の玄関が付いていた。玄関を上つて突当りが理財学科の教室であり、その奥が大学部の図書室になつて居り、そのまた奥が文学科の教室、図書室の左側の部屋が法律学科の教室となつていた。」この建物は旧島原藩時代には来客応接用として使用されていたらしい。

この図書室はどの位の規模であつたかは「慶應義塾五十年史」に拠ろう。「五十年史」は同室に席を置いたことのある菅学応が編纂したものであるから、正確と思える。「凡そ二十畳許りもあらんかと思わるる一室にして、此処に備え置かれし書籍は、当時米国より招聘したる文科教授リスカム、理財科教授ドロップス及び法科教授ウイグモア―三氏の指図に従い、新たに欧米より買求めたる二三千冊の新書を主なるものとし、之に加うるに六角廻転台に載せられたる一部の「センチュリー辞書」を初め、六七冊の「ウェブスターズ氏字書」に過ぎざりしのみか、未だ書庫と読書室の区別すらもなく、唯僅に室の中央に長さ六尺、幅三尺大の机兩三基を並べて、読書用に充て、西北二方の壁に、書架を連ねて、書庫と為す等、至極簡單なるものなりき。随て之が専任の事務員としては固より一人もあるなく、当時同室の入口にテーブルを据えて、之れに座を占めし大学部唯一の幹事が、大学部全員の事務を執るの傍ら、或は館長ともなり、或は使丁とも為ると云う仕組」云々とある。幹事は武田勇次郎、二十三年度義塾報告には「教場

取締、書籍係 武田勇次郎」とある。武田は岡山の人、二十二年卒業して直ちにこの役についた。「館長も司書も閲覧室の監督も書籍の出入をするボーイの役までも武田君一人であつた」武田はすばら煙草を吹かしながら閲覧人を監督しており、学生時代から知っていたので、おい武田、何を出してくれ、彼を見せってくれと要求したと書いてるのは、後年紅蓮洞と号して文壇の奇人扱いされた坂本易徳の思い出にある。武田は三十年二月辞任し、三井呉服店に就職した。その後任が菅学広である。菅は愛媛出身の僧籍の人、二十七年十二月大学部文学科を卒業し、一時京都で布教していたが、二十九年福沢を頼って上京していた。

この頃の図書室に関しての記述ははなはだ少ない。前述した川合貞一の話の中に、当時学生数はきわめて少く、三ヶ年を通じて大学部の全学生数は僅かに百三四十人にすぎなかった。従つて学ぶ学科が違つていても、ほとんど同じクラスの学生のようにお互いに知り合い、交際することが出来た。「それであいている時間には、各学科の学生が図書室や教室に集まつて放言漫語をかわし、まことになごやかなものであつた。」幅三尺大の机が兩三基並べられた閲覧室も、その室で静かに勉強するというよりは、放言漫語の場所であつたようである。

新任外人教師達の指図に従つて、新たに欧米から買求められた二三千冊の書籍がどんな種類のものではあつたか、現在よくわからないが、やはり経済、法律、文学に関する英語の教科用書籍が大部分であつたろう。しかし価格が比較的安い文学書が多く、経・法の書棚は隙が多かつたとは前記坂本易徳が語っている。これに関連があるかも知れないのは日本の古書が多いのを福沢が見て不愉快がつたという話である。「大学の文科ができたときに古典の和書があつた。ところが先生はえらい不機嫌になつたということです」「書庫に日本の古い本がたくさん並べてあつたら先生

ひどく不機嫌で、こんなもの焼いてしまえとおつしやつたそうです」「ちよつとうそのようですが、ほんとうなんです」(章原雅亮氏座談会速記録)これに対して川合貞一は福沢は若い頃国学者系統の国粹主義者から迫害されたからだと解釈しているが、それは何ともいえない。逸話として紹介しておく。

図書室が放言漫語の室であったのは、図書が少なかつたからであらう。明治二十五年七月正科を首席で卒業した林毅陸は、翌二十六年一月大学部文学科に入学した。林は勉強家であつて神田の書籍館(本郷湯島の聖堂跡)や上野図書館には実によくかよつてゐる。上野図書館の入場料は二銭であつたが、十二銭の定期券を買つて連日のように行つてゐるが、塾の図書室の記事は七月二十一日「朝福沢先生ヲ訪ヒ揮毫ヲ頼ム面会シタリ、ライブラリーニテ書ヲ借ル」と一行日記にあるのみである。知人から福沢の書を頼まれて出かけて行つた帰りがけ、図書室に立寄つて本を借りた。英学書生だから「ライブラリー」と呼んだのであらう。盛んに利用したという記事は少しもない。

大学部の新設は福沢が「慶應義塾資本金」の募集などして苦心して実現したものであつたが、私立としては無理だつたのか、大学は帝国大学だけで足りるということで時勢に先んじすぎたのか、福沢の期待通りの発展を見せなかつた。慶應義塾にはこれまで通り、正科と別科のある普通科が、大学部と併立して存在していた。普通科を卒業したただけでも義塾卒業と見なされたから、正科を出て大学部に行くなどは物好きのするところとされ、明治二十五年林が正科から大学部へ進んだときも正科卒業生二十七名中、林一人が大学部へ入つた。勿論、大学部学生は正科卒業生のみをあてにしていたのではなく、他校からの入学もいたが、その学生数は明治二十三年には四十一名、二十四年には七十二名、二十五年に百四名、これが最高で二十六年には九十四名、二十七年には八十四名、二十八年に九十四名、二

十九年に七十七名、三十年八十四名という不振ぶり、例年赤字がつづき、当初募集した資本金を喰い潰して行く結果となったから、大学部書館の整備拡充も望むべくもなく、遂に三十一年一月には教科書貸与を主とする普通科の書館に合併し、大学部書館は解消した。合併された書館の係員は別府藤馬という人であった。別府は山口の人、明治二十二年卒業し、一時郷里で教員をしていたが、三十年上京し、福沢に拾われて書館係兼教場巡視の役についた。この人は後、寄宿舎の少年寮の舎監となり、次で時事新報記者、北海道拓殖銀行員などに転じた。

二 「書籍館規則」

福沢が折角の努力で専門教育のための大学部を設置したが、それがはかばかしく進展しない。官界から呼び迎えた秘蔵弟子小泉信吉も、採点法の改正から普通科生徒の同盟休校が起って、短期辞任というハプニングがまず起った。そこで福沢に次ぐ長老小幡篤次郎が塾長となったが、大学部の不振は前節に述べたとおりである。そこで学内にその存廃の論議が起った。小幡塾長は大学部を廃止して、普通科に力を注ぐ方が良いとの考えを持っていた。それは維新以来の義塾の特色と伝統を存続して行こうとする意見で、評議員では中上川彦次郎がこれを支持した。ところが福沢はこれに反対した。大学部設置のための基本金を募って出発した新制度を、いくらかでも残金のあるうちに廃止することは出来ない。むしろ基本金を再募集して、なおかつ不振をつづけるならその時は廃止しても良からうと主張して、これには莊田平五郎が賛成した。これはしかし表面のことである。流石に先きの見える福沢は、この危機に際しても慶應義塾を元の福沢学校に帰えさせるの愚を悟っていた。むしろ新しい学制改革を打ち出して、大学部中心を強

化したのである。それには塾内の少壮若手教員の激励もあった。大学部を卒業し塾教員になったばかりの林毅陸、川合貞一、氣賀勘重、伊沢道暉、菅学応らが、屢々会合を重ね、革新案をひっさげて福沢に進言した。三十年八月小幡は塾長職を辞し、福沢自ら社頭となって陣頭にたち、学事改良の要領を発表したのである。「是に於てか今後は義塾の主力を大学部に注ぎ、単に普通部の卒業を以て慶應義塾の卒業とせず、大学の科程を卒て始めて義塾卒業の名を与えんのみ」幼稚舎、普通部、大学部各部はらばらに存在し、緊密な連絡に欠けていたのを、六歳にして幼稚舎に入り、二十二歳にして大学を出づる一貫教育を確立したのである。

そして再度の基本金募集に着手した。その趣旨の中に校舎、寄宿舎の狹隘をうったえ、外国人教師雇傭の必要と共に「書籍館も不十分なり」ともうたっていた。福沢の頭の中には百坪程の書籍館建設の計画もあったようである。三十年十月十七日の時事新報に「慶應義塾には是迄とても書籍館なきに非ざれども、今度大に学事を改良するに付ては、新に完全なる書籍館を建築せんとて、其設計を三井銀行新築の主管者たる横河民輔氏に依頼したり、館は百坪ばかりの煉瓦造りにして、西洋最新の模形に依るものなりと云う」とある。横河民輔は前に述べたことのある棚橋絢子の女婿にあたる。

学制改革の方向は定まり、基本金募集のお膳立ても整った。そこで三十一年四月には福沢社頭の下に、小幡副社頭、鎌田塾長の新人事が発表された。鎌田栄吉は和歌山の人、明治九年卒業して直ちに義塾教員となり、以後度々他校に職を奉じたことはあっても、多くは義塾の教員生活を続けたが、二十九年三月鎌田の旧藩主徳川頼倫に扈從して欧米視察の途に出で、三十年十一月帰国したばかり、年齢も四十二の壮年であった。大学部を中心とする一貫教育制度

は、新らたな「慶應義塾規則」（明治三十二年）の中にもりこまれた。書籍館改革もその方向のうちにある。福沢が心に考えていた書籍館の新建築は遂に実現しなかったが、さし当っては書館を煉瓦講堂の一隅に置き、書庫と閲覧室とを区別し、「書籍館規則」を定めた。この「書籍館規則」は従来の「慶應義塾社中之約束」の中の「書籍出納の事」とは決定的に異なる。

「第一条 書籍館ニ蔵ムル圖書ハ専ラ教員及生徒ノ參考用ニ備フルモノトス

第二条 圖書ノ閲覧ハ總テ閲覧室内ニ限リ之レヲ室外ニ持チ出ス事ヲ許サス

第三条 教員ハ特ニ教授參考用ノ為メ圖書ヲ借り受ケ自宅ニ携帯スル事ヲ得、但シ自宅ニ携帯スルトキハ必ず書籍掛リニ通知シ、書籍貸渡帳簿ヘ記入ヲ請求スベシ

第四条 書籍掛リノ外ハ館内ノ圖書ヲ検索シ、若シクハ出納スルコトヲ許サス 但教員ハ随意ニ圖書ヲ検索スルコトヲ得

第五条 生徒圖書ノ閲覧ヲ望ムトキハ其旨書籍掛リニ申込ムベシ

第六条 閲覧者ハ一時ニ三冊以上ヲ借覧スルコトヲ得ズ 但教員ハ此限リニアラズ

第七条 借覧ノ書籍ヲ紛失シ、又ハ之レヲ汚損シタルトキハ時価ニ依リ之ヲ償還セシム

第八条 閲覧室ニ於テハ静肅ヲ旨トシ音読談話喫煙ヲ為スベカラズ

第九条 書籍館ノ開閉時間ハ左ノ如シ

一 毎日午前八時開館午後四時閉館 午後六時開館午後九時閉館

一 土曜日午前八時開館午後四時閉館

一 臨時休業日午前八時開館午後四時閉館

二「書籍館規則」

第二章 初期図書館

四六

一 大祭日ハ終日閉館

一 春夏冬期休業中ハ午前八時開館正午十二時閉館 但シ夏期休業中七月廿日ヨリ三十一日迄ハ曝書ノタメ閉館

第十条 前条ノ開閉時間ハ時季ニ依リ臨時變更スル事アルベシ

第十一条 寄贈ノ書籍ハ特ニ寄贈者ノ姓名ヲ記シテ書籍館内ニ保存ス

これを見ると書籍館備付の図書は参考用図書であつて、従前の教科書貸与の書館とは全く違っている。教科書貸与の廃止はこの時の改革の中の一項目であつた、「教科書ハ総テ学生ノ自弁トス」は幼稚園から大学部に至る一貫せる規則であつた。最早、慶應義塾は明治当初以来の洋学校ではない。幼稚園に始まり、大学に至る首尾一貫せる専門教育の学校となつた。「書籍館規則」が出来て初めて、本来の意味の図書館が出来たのである。

煉瓦講堂の中の書館は明治四十五年創立五十周年記念図書館が新設されるまで続くのであるが、その位置や内部の変化は幾度か行われた。最初は講堂の一階にあって三十一年三月就任の小松周介が書館係であり、九月にはその上に書館幹事という名称で菅学応が就任した。菅はかつて大学部書館にいたことがあつたが、後教員となり既述のように林毅陸らの若手教員の中にあつて、義塾革新運動を起していた。そして学制改革が行われたときそれら教員はそれぞれの新設役職についたが、菅も書館幹事になつたのである。

学制改革も緒についた頃であるから、この二人のコンビも書館の充実には力をつくした。学校側の報道雑誌「慶應義塾学報」の三十一年三月号に「生徒の閲覧する書籍は経済書最も多く、法律学之に次ぎ、文学書其次なりとぞ。因に云う今度外国へ数百部の洋書を注文したる由なれば、其到着後は生徒珍重なる智識を得るの便を享くべし」又「在



煉瓦講堂（明治24年頃撮影）

大坂なる慶應義塾々員本山彦一氏は今度同塾書籍館へ和漢書三千部を寄贈さるる筈にて、歴史部五百冊を己に三月上旬寄送済となれり」（同誌四月号） 本山蔵書は引続き五月にも八十三部五百四十九冊到着した。本山ばかりでなく日原昌造もペンザムス氏文集十一冊、川合貞一はヘックス氏社会主義およびハルトマン氏ダーウソン氏動物進化論（何れも独文）二冊をという風に、寄贈書もめつきりふえた。そこで菅幹事は上野図書館の規則にのっとった目録を作ることに着手した。学報十一月号に「是迄義塾書館にも目録なるものありしと雖も分類明晰ならず、屢々借読者一々書架に付て欲するものを搜索する如き不便あること少からず（中略）愈々完全なる書目を製作するの必要を感じ、目下それぞれ準備中にて此年末までには是非完成せしむべし」とある。しかしその意気込みにも似ず、菅もやめ、小松も三十二年六月には退職したので書目は出来なかった。書館係は横田良吉に変わる。

以上は学校側の記述で、閲覧対象の学生側からいうと不満

が多い。学制改革に呼応して学生が発行した雑誌「三田評論」は義塾当局への批判で埋められているが、書館の不備などは攻撃の好目標であった。「慶應義塾改革論」という大げさな題名をつけた論文（同誌三十二年四月）は蔵書と設備について次のように述べている。「第一書籍の少きこと之れなり、就中比較的に具備せるは理財科の参考書なるべし。然し之れ英書のみ、我國の財政、銀行の金融、鉄道等に関する書籍は一もある事なし。英書を読むは科学的智識を養うに必要なるは論なし、欧米の財政其他の經濟事情に精通すること或は難からざるべし、然れども日本の經濟学者及実業家としては先づ日本の經濟及財政史并に經濟事情に通ぜざるべからず。然らざれば彼は理論家たるを得るも未だ社会に活動すべき資格を備る者と称する事を得ず」元々英学校に由来して発展して来た書館であるから、まだ日本の新刊書が不充分であったことは頷ける。

次に場所である。「充分の資力なき間は別に圖書館を新築するを得ざるが故に、教室の一二を以て之に充つるは己むを得ざる」として之を認むるものなれども、現在の位置は大に厭うべきものなりと信ず。其場所は学生の昇降すべき煉瓦講堂の一角にあり、階上の教室には授業の始終する毎に、履音囂々として読書を妨ぐる少々に非ざるなり、特に卓上は塵埃を以て敵はれ、其掃除は不定の時間に行わるるが故に、学生は読書半にして屢々退席を命ぜらるの不幸に遭遇せざるを得ず。加うるに疎造の木椅子は長く静座するに堪えざらしむ、其他普通科の少年等は猥りに喫飯の場所に充て、談笑他の勉強を妨ぐる少々に非ず、一言以て之をいえば義塾の書館は全く混沌無規律の状態にあるものと云うべし」後に教員になった柴田一能も「ドーも普通科一年あたりの生徒が囂々押し込んで来て、詰らぬ事を大声で話したり、段々の手摺を跨いで滑り下るのを楽しみにガタガタ上り下りには課業中誠に閉口だ。小兒だから罪なし

に遊んで居るが是非之は禁じて下さい」（同誌同年七月）と悲鳴をあげているが、さもあらんと思われる。

鎌田栄吉が塾長に推されたとき競争相手に門野幾之進がいた。門野は鎌田より先輩で、永く教頭を勤め、塾内で重きをなしていたことは前述した。後年門野はこの時の塾長候補は自分から辞退したと語っているが、塾の教員、学生、卒業生の間では鎌田か門野かで下馬評が喧しかった。鎌田の新塾長決定はむしろ意外の感をあたえたものである。その結果鎌田塾長、門野教頭、益田英次塾監の三頭政治になったのであるが、門野の多少持たれた心のわだかまりをほぐすためか、福沢は最新の教育視察という名目で門野を欧米に旅立たせた。それが三十一年四月二十日のことで、鎌田の塾長就任はそれに先立つ四月四日である。そして翌三十二年六月十三日帰国、盛大な歓迎会が催され、欧米視察による義塾内の改革いかんと皆から見守られた。

その結果あらわれたものは二つある。一は塾内からの留学生の派遣であり、他は書籍館の充実であった。柴田一能は早速その喜びを筆にした。「例の八釜敷かつた図書館の一件だが、是も此度の改革には是非何とかならねばならぬ大立物の一つで、門野先生のお技量果して奈何んと片唾を呑んで見て居ると、仕たりや為たり、煉瓦講堂二階の右半分を惜気もなく切り取つて、之に図書館全部を移し、蔵書室、読書室共各今迄の倍となり、教頭が独逸にて購入せられたる新版書をも陳列し、追つて夜間の閲覧をも許すと云う事で、之も略備わつたと謂うても善かろう。」（同誌三十二年九月）これが学校側の表現によると「従来煉化講堂の階下でありしを階上南端の二講堂に移し、書架、書目等をも刷新し、尚其西隣の二講堂を学生読書室に充て、又書籍の貸出しは是迄午後四時頃までなりしを、同八時迄延引し、一層学生の便宜を計りたる等、一大新面目を呈せり」（学報三十二年十月）閲覧室の拡張、時間の延長に加えて蔵書の

充実に努力した。その一は図書委託制の取入れと、他は追善寄附金を募って記念図書を購入する計画である。前者は個人の死蔵書を預って活用させようとするものであるが、すぐそれに応ずる蔵書家はなかったが、後者は三十二年には森村明六、森村豊兩人の追善寄附三千円が、三十三年には教員浦田義雄の香典返しが寄附された。

三十二年十月横田辞任し、後任は川勝貞吉が寄宿舎舎監から転任した。この人の代に初めて閲覧統計らしきものが発表された。三十二年十一月には

「閲覧時数 二百二十四時

貸出書数 四百八十八冊

閲覧人数 三百六十七人」

同年十二月一日より十五日までは

「閲覧時数 百二十九時

貸出書数 百六十五冊

閲覧人数 九十五人」

貸出書籍の種類は経済財政の部に属するものが最も多く、これに継ぐものは歴史、政治であった。(学報)

川勝は三十三年九月退任して、平山幹次がこれにかわった。平山はこの年から三十八年一月迄、四年四ヶ月その職にあったが、これ迄の書館係は一年ないし一年未満の短い在職で、概して一時の腰掛けに就いたポストであった。ここに一括して履歴を述べておこう。小松周介は秋田の人、卒業後一時郷里に帰ったが、上京して職を求める間、書館

係になった。退任後は東京興信所に入社、四十二年頃は東洋印刷の支配人であった。横田良吉は長崎の人、高等科を卒業して新聞記者を勤めてから書館係になった。従って「無闇に意張る」といわれて不評であった。辞任後は朝日新聞に入り、次で中学教員に転じた。川勝貞吉は京都の人、郷里に中学が創設されたので書館を辞した。後、明治生命や藤田組に在籍した。平山幹次は彦根の土族出身、比較的永く勤め、仕事にも熱心であった。就任早々読書室に新聞、雑誌、ウェブスター字典を備え、随意に閲覧せしめた。今日という自由接架である。そして閲覧時間も午後九時迄延長した。書館係補助に池端新次郎を雇い、これも三十六年まで比較的永く勤務した。この頃の書館の蔵書総数は六千五百五十二冊と数えられている。

三十一年九月に書館幹事になった菅学応についてはこれまでも幾度か触れたが、余談も加えておこう。菅が少壮教員に交って義塾革新運動に気焰をあげていた頃は自ら称して「小福沢」といつていた。高橋誠一郎によると「福沢先生が六尺ゆたかの大男であるに反し、菅さんは五尺に足らぬくらいの小男だった。しかし菅さんは自分は福沢先生そっくりだと、いつも自慢していた。ただ違うのは自分の食事が早いのに、先生の方は遅いことだけだといつていた」という変り者で、学生からは「小福沢」をもじって「笑福沢」とからかわれた。菅はその後、「修身要領」作成事務や「学報」編輯にたづさわわり、「慶應義塾五十年史」を編纂したのが最大の業績となった。石河幹明の「福沢諭吉伝」も手伝って、昭和七年九月に歿している。

三 初代監督田中一貞

明治三十四年二月三日、福沢諭吉が歿した。「先生が亡くなれると、多分学校が一週間ぐらい休みになるだろうというようなことをひそかに語り合つて、内々楽しみにしていたものもあつたが、いよいよ先生逝去の悲報に接した時には、三田山上に蕭殺の氣が漂つた。二月八日午後零時四十分、ほぼ乾いた雪解けの道を、先生の柩の先に立つて、銃を逆に肩にかけて、蕭々と繰り出した時には思わず胸が一ぱいになつた。」これは当時十六歳であつた高橋誠一郎の思い出（「わがことひとのこと」）である。また獅子文六の父岩田茂穂は明治五年入学の古い塾生で、福沢にすめられて横浜で絹物の貿易商を営んでいた。「父の死んだのは福沢より一年後だつた。福沢の葬式の時に、すでに発病していたのだが、ムリ押して、横浜から参列した。その帰途、品川駅へきた時に、急に視力に異状を來たし、それからズツと死の床についたのである」（「福沢諭吉と私」）。塾内で学ぶ無心の少年にも、はるか昔に塾を出た老実業家の胸にも、いたたまれない悲しみがつき上げて來た。力強い牽引車を失つたという空虚感が誰しもの心に残つたことだらう。二月八日の葬儀には無慮一万五千の人が徒歩で黙々と塾から麻布善福寺へ歩き、それにも増す送葬の男女が沿道に列んだというが、一代の偉人を失つたという哀惜と共に、福沢を失つた慶應義塾がこれからどうなるだらうかと、秘かに思ったにちがいない。殊に柩の左右に随從した当面の責任者である小幡副社頭、鎌田塾長、門野教頭らの苦悩は深いことであつたろう。

慶應義塾は慶応四年鉄砲洲から新錢座へ移つたとき「慶應義塾之記」を發表して、最早福沢の一私塾ではない。社中共同の団体、今日の言葉でいえば法人たることを宣言した。義塾之記の冒頭に「今爰に会社を立て義塾を創め、同志諸子相共に講究切實し」と書き、入門帳には「慶應義塾会社」と記した。今日では会社といへば営利会社のことを

指すが、福沢の意としたところは福沢が外国で見たコーポレーションの学校、結社、共同の団体として経営したいということ、これは繰返し繰返し福沢が強調しているところである。義塾は福沢ひとりのものではない。一つの同人社だ。皆でやるものだと言をすばくして共同結社の考え方を説いても、当時ではなかなか理解されなかった。世間では慶應義塾はやはり福沢の学校で通り、福沢が死んだとすると後はどうなるかがすぐ頭にきた。徳望のある塾主が死ぬと学生が離散して、明治初年以來の私塾はほとんど消えた。義塾と並び称された中村敬宇の同人社も廃校となった。それは独り門外漢の意見ばかりでもない。塾に学んだ小松緑も「瓦全は玉碎に如かず、慶應義塾は福沢先生と共に終始した方が」好いという考えを持っており、鎌田塾長の思ひ出にも「逝去前後は義塾の後片付と云うような方のみ考えた悲観」論者も多かったという。

福沢の死によって義塾存立の危機はかつてない程重大であった。事実、結社とはいうものの、福沢個人が著述などで収入がよかった時分は、何かという支出の出所がないと最後には福沢の懐中ふとこをあてにした。万が一のときにたよれる福沢は今や歿いのである。そこで葬儀一切が終るとすぐ着手したのは結社の強化と、義塾財政の確立であった。維持会を設けて基金を募集し、同窓会を育て団結を推進した。内には小幡を社頭とし、阿部泰蔵、伊藤欽亮、波多野承五郎らをして会計監査役たらしめ、義塾存続への努力が払らわれたが、他方学事はほとんど従来の情性といってよかった。その点、書館も同様である。在学生の図書購入費募集の小さな動きもあったり、鱸松塘旧蔵の「資治通鑑」(山口善兵衛寄贈)「大英百科辞書」(牧口義雄寄贈)などの所収があった程度で、これといった大きな変化がなかった。義塾全体が沈滞といつてはいいすぎかも知れないが、何事も手につかない。とうとう学生の不満が爆発して生前

の福沢に親任の厚かった日原昌造のところへ、大学部学生が直訴に行くという騒ぎとなり、門野教頭、北川礼弼塾監の辞任という変動があつて、鎌田塾長の裁断一本にしばらくされるようになった。そこへもってきて好都合なことは、福沢の生前に出発した義塾の留学生達が、新しい抱負を持って帰ってきた。義塾を完全なる私立大学たらしめようとする、それには分科制度の完全実施、大学院の設立、公開講義、出版事業などの重要さを力説し、新帰朝の各自それぞれがそのポストについて実施する。図書館の振興もまたその一環であつたのである。

三十五年七月、三ヶ年の留学から帰った堀江帰一は早速学報に図書館拡張論の火の手をあげた。「近時外国の諸大学が最も力を尽すは図書館の設備にして、蔵書の冊数数十万に上るもの少なからず、大学が学生を募集し又は公衆の参観を許す場合には、常に図書館の事を挙げて大学設備の完全を証明する次第にして、学生も亦教授の講義に依頼して知識を得るよりは、寧ろ図書館に於て自主の研究を試むるものの如し。日本の如き邦語を以て説明する専門學術の書籍に乏しき国に於ては、多少講義に重きを置くの必要ある可けれども、若しも奨学金の制度成り、幾多の卒業生が塾に留まりて専門学科を研究する場合には、勢い外国の書籍に依て知識を開発せざる可らず」これに呼応して学生側の評論に板倉卓造がそれに賛成して「吾図書館の所蔵書籍に就てその最多数と称するものを經濟書となす、而かもこの經濟書なるもの、多くは二三十年以前に出でたるものにして、新著と称すべきは殆んど数うるに足らず、殊に此等の書籍、悉く一般の学理を講じたるもののみにして、特別に各段なる問題に就て研究せんと欲するものに対しては、毫も便益を与うることなしというも不可なし、故に吾人の望む所は義塾の主力を図書館に注ぎて、断えず欧米の新著を購入し、一意其拡張を図る事是れのみ、然らずんば寧ろ之を閉鎖するの優れるに如かず」と極論した、これに影響

されたか、どうか、当局側にも前向きな姿勢が見え始める。「高等教育に最も欠く可らざるは図書館の設備なり、近世の大学教育は大半図書館に依て授けらるると云うも決して失当の言に非る可し。目下義塾の図書館には和漢洋の書籍約一万冊を蔵む、法律、経済、政治、文学等に関する著書及び辞書類は殆んど整備せり……義塾が資金の増加と与に大に図書館を拡張せんことは其重なる希望の一なり」(慶應義塾便覧) 図書館をして高等教育に欠くべからざる施設と学校当局者をしていwashめたものは、慶應義塾においてこの文章を最初とする。

そして差当っては平山書館係を三十六年に書館主任に昇格させた。平山主任の蔵書充実策は二つあった。一は寄贈の勧誘であり、学報に広告して特志家の賛助を乞うた。その結果大磯の伊東尚孝から三十七年四月和漢書三百余冊の寄贈があった。伊東家からはこれが皮切りで大正年代まで寄贈が続けられた。二つには図書購入基金の積極募集である。折から日原昌造と中井芳楠の逝去があったのでその記念書籍費募集が同時に始められた。それとほとんど同時に武藤山治から壱千円のこれは工業に関する図書購入という限定がついて寄附された。しかし平山主任の最も大なる功績は筆写の書籍目録が出来たということであろう。その目録は今日見ることが出来ないもので、内容の良否はわからないが、平山の後を継いだ田中一貞時代に比較的早く印刷目録が出来得たのは、平山の礎石がものをいったと考えられる。平山主任は三十七年冬、療養生活に入り、書館に姿を見せなくなった。正式の辞任は三十八年一月で、同年九月名古屋で歿した。

平山の後任田中一貞は義塾第二回の留学生で、三十七年三月帰国したばかりの大学部教員であった。兼任役職名は書館監督であった。書館の長に大学教授が就任する最初であり、以後監督は代々大学教授の兼任となり、昭和十九年

から名称を世間一般に使われていた館長に変えた。従って田中監督は今では初代館長といわれている。新鋭の大学教授をして書館監督たらしめた鎌田塾長を初めとする学校当局の意気ごみは、既に新しい書館の建物の必要を感じていたからであろう。そして田中はその期待に答えて、遙かに優れた海外の大学図書館の移植に全力を傾けたのであった。田中の事蹟を語る前にその履歴や人となり話をしておこう。

田中は山形県鶴岡の出身で、明治五年七月生れ、父は莊内藩士一俊の三男、先祖は柳沢吉保に仕え、荻生徂徠と親しくし、後柳沢の老臣を斬って隠世した田中桐江を血族に持つことを誇りとしていた。鶴岡の蔵修学校及び鶴岡英学舎に学び、高山樗牛の若い頃と交りがあった。明治廿三年十月慶應義塾に入学、二十九年十二月大学部文科を卒業した。そして宮崎県延岡の私立学校亮天社の教員となった。居ること四年、三十四年二月同社を辞して、義塾に帰り教鞭をとったが、間もなく林毅陸と共に第二回海外留学生に詮衡された。同年五月あわただしく横浜を出帆し米国へ向



田 中 一 貞

った。当初はコロンビア大学で学ぶつもりであったが、変更されエール大学に入学した。ちょうどその年は大学創立二百年にあたっていたので盛大な祭典が行われた。十月二十日より廿三日までの四日間であったが、廿一日の夜は一万人ばかりの炬火行列があり、その中に日本人留学生の一団も加わった。田中は入学早々ながら、企画に、趣向に大活躍をした。炬火行列の日本人の一団の先頭にはエール出身の政治家鳩山和夫が、わざわざ日本からきて水色のガウンを

着て歩み、続いて桜色のガウンの在學生が日本提燈を手に手に捧げ、その中央には御所車を擬した万燈を六人がかついで歩いた。それは田中が企画し、大工を指揮して作らせたもので、大きさは一間余、屋根は金色に宮殿造りであった。横の四面には絵を描いた。前面は富士に朝日、後面は菊、左側はアンクルサムが日本美人と握手の図でこれらは西池某が描いたが、右側面は田中が筆を揮った。日本楽隊が大なるラッパを吹き、これより“Yall for Japan, Japan for Yall”という字を吹き出している模様であった。これに燈火をつけると非常に美しく見え、「好奇心に富める米人の嗜好に投じけん、沿道の喝采天地を動かすばかり」であったという。田中にはそうした器用さ、茶目っ気があったと見える。しかしエール大学のある閑雅幽静なるニューヘブンでは、下宿屋の婆さんの喧しいこともあって良く勉強した。大学院ではC・サムナー教授に師事し、マスター・オブ・アーツの称号を得た。

在米一年、三十五年六月には仏蘭西へ渡り、パリのコレージュ・ド・フランスでG・タールド教授の社会心理学を聴講した。パリで田中が借りたアパートの一室は、パリの貧民街であるローモン町四番地の薄暗い五層の石造建物の最上階であった。応接間向の八畳位の部屋と寝室向の十畳位の部屋、食堂向の六畳位の部屋に台所がついていて、画家河合新蔵と一緒に住んだ。前住者はこれも画家の鹿子木孟郎であったという。この頃のことは田中の「世界道中かばんの塵」なる本に面白く描かれている。代々物ぐさな日本人の画家がいたという部屋だけあって、塵埃と蜘蛛の巣に満ち、便所は臭気紛々として下の借室人からしばしば苦情をうけた。南京虫の跋扈もはなはだしく、工夫して寝台の脚の下に、石油を入れた皿を置いて防ごうとしたが、それでも駄目であった。すると誰だかが「それは南京虫が一人天井に登り、見当をつけて落ちてくるのであらう」と説明したという。しかし悪いことはかりでなく良いことも

あつて、五層樓の最上階であるため、部屋は明るく、窓からは空と町家の屋根の上とが見えて、恰かもアツチック・フィロソファーの住居のようである。早速、画家中村不折は窓から星が見えるから星の裏店うらだなだといつて、得意の筆を揮つて「星裡閣」と名付けてくれた。ここには喧まじやの婆さんはいない。田中は思う存分、大言壮語し、夜更かしも出来た。田中らは八百屋から青い紙袋に入つた日本の米と称する穀物を買つてきて、アルコールランプで飯焚きをした。日本の飯が喰べたくなると牛肉と葱と米とを持って、留学生たちがこの部屋に集まつてくる。その仲間には、前任者であつたため半主人格である鹿子木孟郎や、藤村知子多、土井晚翠、白井雨山、末広重雄、岡精一、山口弘一、直木倫太郎、今井吉平、和田英作、白鳥庫吉など多士濟々で、ラテン街における日本人の倶楽部のようなであつた。田中よりは先輩であるが、留学は遅かつた田中萃一郎はパリにおける田中一貞の行動を「留学」とはいうけれど、美術家や芸術家と交際して、まるでその案内人みたいだ」と悪口したそうであるが、彼らとの交渉があとで図書館を建てた時に、数々の便宜があつたという利点につながつた。夜更かし、放縦な生活とはいふけれど、所謂花のバリの飲菜、婦人と戯れるなどには潔癖に近く、テアトルフランセーで姦通劇の上演を見て、「此の穢わしき罪の見せ物とも云うべき劇場には、金甲燦爛、佩劍鍔々たる長身美鬚の兵士が門番を致居候」を苦々しげに報告している。

留学期限がきていよいよ帰国というちやうどその頃は日露戦争が今始まるか、どうかという時であつたため、ロンドンを出る時の乗船因幡丸は文字を消し、船体の色を塗り替える始末であり、スエズからコロンボまでは英国軍艦が護衛してくれた。香港につくとすでに開戦となつて因幡丸では危いといわれ、米国船シヨーマットで日本へ向つた。対馬沖まで来ると遙るか水平線上に煤煙が見え、船の移動と共に艦隊が姿を現わした。それは角田中将のひきいる旧

本の警備艦隊であったが、その中の水雷艇一隻は全速力で疾走し来り、二三町の距離に近づいて船籍を確かめる一幕もあった。

こうして三十七年三月二日無事帰国したのであった。帰国後は直ちに文学部第一学年受持教師となり、フランス語を教え、理財科、政治学科でも仏語と社会学を講じた。そして翌年、書館監督に兼任を命ぜられることになる。

田中の本職は社会学にあつて、佐原六郎の「慶大の初代社会学教授」（三田社会学会誌）に詳しい。フランス流タルドの社会学で、得意のフランス語を交えて学生を煙に巻くことがあったという。容姿端正、しかもハイカラで鼻眼鏡をかけ、常にモーニングを着ていたので冠婚葬祭係と宛名された。風采もあり、押し出しが立派なので、外部関係では鎌田塾長の代役なども勤め、学校の役員の要職にもついた。既述のように多くの知己を持ち、後輩の面倒も良く見た。殊に郷党の人々の援助育成には力を尽し、後にも述べるように図書館内に荘内閥といわれる下地をつくった。郷里の老学者羽柴雄輔の晩年の世話などもして、柳田国男から福沢の所謂「学者の飼ひ殺し」を地で行くものだと言ふされたこともある。

四 慶應義塾図書館の誕生

田中一貞監督の就任以来の書館の発展は目覚ましいものがある。まづ就任早々、「慶應義塾図書館」が正式名称になった。これまでも書館が正式呼称であつても、時により私的に書籍館とも、図書館ともいわれ、ある時は学生にライブラリーと英語で呼ばれたこともあった。しかし正式に図書館と呼称が定まり、蔵書印も改められたのはこの時である。

る。書館というも、図書館というも今日では同じように思えるが、当時は書籍館をつづめた書館より、図書館という方が新しく感じられたものに違いない。大体書籍館という言葉は古くから存在し、図書館という言葉は明治二十年代から普及され定着されたものだといわれる。まづイメージを新しくして、次で設備の拡充を行った。

今まで煉瓦講堂の階上南側を占めていたのを、北側の旧会議室、大広間に移し、その階下の四室を書庫とし、「厚板造りの書棚の高さ二間もあるのに木製の梯子」をかけて出納し、簡単な「エレベートル」を使って二階の閲覧室に本を運んだ。つまり煉瓦講堂の向って右側の一階二階全部が図書館になった。当時の煉瓦講堂内の室の配分を三辺金蔵が回想するところによると「正面玄関を這ると、左側が庶務・会計・学務の諸課で、右側が図書館―如何に小さかつたことよ―であつた。二階に上ると図書館の上は閲覧室、庶務会計課の上は八畳間二つ続きくらいの会議室で、聯合教授会などは大抵ここで開かれた。会議室の南隣りは塾長室、廊下を隔てたその前の室は幹事室ではなかつたかと思ふが、これはハツキリしない。二階の旧大広間は一般読書室になり、旧会議室は教員閲覧室、雑誌室及び新聞室等になった。この読書室を利用した榎智雄は「当時の図書館閲覧室は赤煉瓦講堂の北端、二階の広間、窓からは隣りの演説館の瓦壁が見えていた。閲覧室は三四十名程度の席があつたと思うが、利用者は殆ど大学生で普通部生は余り見受けなかつた。冒険小説の耽読に始まり、探險記、小説と、時間を忘れて乱読し、閉館の時が来て追い出されたこともしばしばあつた。」

設備の拡大とともに施設の充実にカード目録の作製が急がれた。前任者平山主任は筆写の目録を作り上げたが、外国の図書館で学んだ田中監督はそれでは満足できない。館員を増加してでもカード目録の作製に努めた。「幸に館



一般読書室

員東野利孝氏を初め一同の精励に依り、漸く分類及び著者名の洋書カード目録と、分類及著者名和漢書目録とを調製」(五十年史) することができた。それがためには就任して一年半位はあるいは法律書の貸出停止、次で文学書の停止とか、閲覧者の勉強の妨げとなることが屢々で、学生の苦情の種となった。それはともあれカード目録の完成は近代図書館の体裁を初めて整えたということができよう。

そして図書館規則も新しく制定された。

「第一条 図書館ニ蔵ムル図書ハ専ラ教員生徒及塾員ノ参考用ニ備フルモノトス

第二条 図書ノ閲覧ハ特別ノ許可ナクシテ総テ閲覧室外ニ持出ス事ヲ許サス

但シ教員ハ特ニ教授参考用ノ為メ図書ヲ借り受ケ自宅ニ携帯スル事ヲ得

第三条 学生図書ノ閲覧ヲ望ムトキハ借覽券ヲ掛員ニ示スベシ

第二章 初期図書館

六二

第四条 閲覧ハ一時ニ三部十二冊以上ヲ借覽スル事ヲ得ズ

但シ教員ハ此限りニアラス

第五条 借覽ノ書籍ヲ紛失シ、又ハ之ヲ汚損シタルトキハ時価ニ依リ之ヲ償還セシム

第六条 閲覧室ニ於テハ静謐ヲ旨トシ、音読談話喫煙ヲ為スベカラス、若シ不都合ノ所為アリタルトキハ相当ノ処分ヲナスベシ

第七条 本館ノ開閉時間ハ左ノ如シ

一 毎日午前八時開館午後十時閉館

一 土曜日午前八時開館午後四時閉館

一 日曜日午後零時半開館同五時閉館

一 臨時休業日午前八時開館午後四時閉館

一 大祭日ハ終日閉館

一 春夏冬期休業中ハ午前八時開館正午十二時閉館。但シ開閉時間ハ時季ニ依リ臨時變更スル事アルベシ

第八条 寄贈ノ書籍ハ特ニ寄贈者ノ姓名ヲ記シテ館内ニ保存シ、慶應義塾學報ニテ之ヲ報告スベシ

これを前の「書籍館規則」と比較すると大幅なサービス改善があげられる。借覧図書冊数も多くなり、開館時間も途中で休息することをやめたり、九時閉館も十時に改め、日曜も開き、夏期の曝書休みも廃めた。しかし最も大きな変化は借覧券の発行である。これは図書館を大学図書館たらしめる手段であった。既述のように書館は一貫教育確立の際に大学部のそれと普通科のそれとが合併された。以後、年齢も違い、学力の差もある大学生と普通部生とが協同利用して、屢々年少の普通部生の騒々しさに大学生が悩まされた。しかし段々に利用者が増えて行く傾向は

あった。それが借覽券制度によって普通部生の制限が打ち出された。借覽券は大学生は無料で貰えたが、普通部生は二十銭とられた。「普通部生徒をかく継子扱をなすは、其の図書館に入るを拒むの方針」と三田評論に憤慨の投書のあるのはもつともいえよう。ともあれ、図書館の目標は大学図書館たることが明瞭化された。

三十九年には新分類目録が採用された。それは三十八年八月の蔵書統計と三十九年三月のそれとを比較することによってわかる。三十八年度の分類は八項目で哲学書類、文学書類、政治経済書類、法律書類、科学書類、教科書類、辞書類、雜書類である。教科書類などの項目に入る本は教科書貸与時代のものの名残りであろうか。政治経済書が一括されているのは古い経済の語義である政治色の強い経国済民の考えからであろう。歴史書類などの項目がないのは恐らく文学書類に入れられたのであろうか。ところが三十九年度のは整然たる十門分類である。即ち、哲学宗教、文学語学、歴史地理、政治外交、経済、統計、法律、科学諸芸、字書、叢書雜書。これが第二次大戦後までつづく分類の根幹を型造るものとなった。

蔵書の充実のための資金獲得の運動は平山主任時代に引つづき行われたが、宣伝も行き渡っていたので後続が絶えなかった。三十八年二月には小寺泰次郎が死去し、その遺言によって小寺謙吉が一万円を寄附した。同年四月小幡篤次郎死去によって小幡図書基金募集が行われ、これも九千二百余円の応募があった。共にその利子で圖書を購入する仕組である。その他、平山基金など死亡者の友人知己などによる小規模のものは頻々と行われた。

三十九年二月「星文庫」の保管の決定は図書館の充実躍進を物語るものである。その冊数一万二千八百三十四冊は図書館蔵書一万四千四百十二冊（同年三月調）に匹敵するが、その蒐集範囲は広く深く、保管契約年限の八ヶ年が切

れた大正二年、これが全部寄贈となつて今日に至っているが、なお価値を失わない良書を以て満たされている。

「星文庫」の原所蔵者は三十四年六月廿一日、東京市参事会で暗殺された政治家星亨である。自由党の領袖、伊藤内閣の通信大臣の経歴を持つ星が、改進黨の地盤である東京市会へ無理に割り込んで勢力を張っただけに、星亨をもじつて「押し通る」といわれ、剛愎不遜の存在とされた。しかしこの星が大した勉強家であつて、その書齋には万を数える蔵書があつたのは隠れもない事実であつた。星は文久元年十二歳にして横浜の幕府直營の英字所で学び、慶応三年十八歳にして幕府開成所の英語世話役心得になつた。幕府崩壊後も各地で英字を教える洋学者の道を歩み、官界に身を投ずる切掛けも訳官として招聘されたことに始まる。明治七年から十年までは大蔵省から英国留学を命ぜられた。のち代言人となり、自由民権運動に投じて波瀾の活動期に入つても、隙さえあれば本を手にしたのは、もともと洋学者であつたからに外ならぬ。

星の蔵書は「文学、歴史、地理、法律、経済、政治関係のもの、これが大部分を占め、その中で法律経済政治の書物と、歴史地理文学の書物とが、部数において匹敵して居りますが、此等を外として、音楽のものもあれば、美術のものもあるというように、各種各部門にわたり、広く有益な書籍を多数に蔵されている」又「学者にして其書齋に一万冊の本を持つて居るということは、必ずしも稀な例ではないとしても、政治家としてあれだけの書物を集めて居られたということは、寧ろ不思議な話に属する」これは板倉卓造が星の記念講演での言葉である。しかもその蔵書の質において最高のものを蒐めていたことを板倉は専門の国際法に関する書籍を例にして語る。国際法の大家オッペンハムがオーソリタチーフなものとして推賞しているリストと比較して、英書は十三種のうち星の所蔵せるもの十種、

米書は八種あるが、その全部、仏書は七種中一種、獨書は十四種中四種という風であり、オッペンハイムが挙げた以外のものでも、英書と仏書に関する限りは一般国際法、戦争、中立等の問題の書籍は当時の第一級文献が殆んど網羅されているといわれる。しかもただ買い集めて眺めていたのではなく、寸暇をおしんで読み、その本にはアンダーラインが各所にひかれて熟読の跡を見せている。

星はその政敵から奸悪の張本のように罵られていたが、「案外淡泊の人にして金銭に就いてはきれいな男」（原敬日記）であった。従って星の歿後、遺産とするものは僅かにこの書籍が残っただけで、蓄財はなく、むしろ借財が残ったといわれる。その中で未亡人つな子はその遺蔵書を夫が最後に尽力した東京市に寄附しようとした。それに対して市当局がどんな態度に出たかは知らない。結局、田中の奔走により、その遺蔵書があげて慶應に委託されたのは田中の功績といつてよからう。

星文庫の委託を皮切りに委託寄贈がめっきり増えた。その主なるものは、寄贈では四十年に古い塾出身者王藤精一が歿して、その遺蔵書百八十八冊が、四十一年には故藤田茂吉の蔵書百三十余冊が、米人レーンが文学書百冊を、四十二年には林董伯爵が百四十六冊を収めた。委託のものでは四十年に田安德川達孝から和書三千四百五十八冊が、四十一年には那珂通世歿してその蔵書四千六百冊が、四十二年には佐々木哲太郎の和漢書七千八百九十四冊があった。佐々木は昭和二年逝去の際、弟誠四郎より改めて寄贈され、佐々木文庫と呼んで今に珍藏されている。佐々木は佐賀の人、副島種臣の家扶をして漢籍に親しんでいた。この方面の蔵書に乏しかった塾の図書館では稀覯書こそ少いが、広い範囲に涉って集められているということで便利であった。塾の教員をしていた与謝野寛はその編纂になる「日本

古典全集」にはこの文庫所蔵品がきわめて多く採用されている。図書購入基金としては四十四年九月根津嘉一郎から大阪市公債一万円（時価一万三百五十円）が寄附された。毎年その利息で購入した図書は根津文庫と名付けられた。この間、平常の予算による図書購入は続けられたのであるから、蔵書は飛躍的に増えた。

かかる間にも図書館の整備は続けられ、特記するべきものは印刷の蔵書目録が、まづ洋書目録が三十九年九月に、次で和漢書目録が四十年十一月に発行されたことであろう。図書館の改善、蔵書の膨張のさなかにこの事業が行われ、困難を極めたことは和漢書目録の緒言の中に「本館は一方には是等の積極的事業に着手し、其余暇を以て整理事業に従事するが如き有様なりしを以て、館員一同の困難は一方ならず、此三ヶ年間の夏期休暇の如きは殆んど之を全廃して、昼夜此業に尽瘁し、為に続々病者をさえ出せしことあり。而して館員の数僅々八九人に過ぎずして、其半数は昼夜の図書貸出しに従事し、残りの半数は平常の事務を執る傍に整理の事業を遂げざるべからず、殊に日露戦争の当時にありて館員の徴集せられて、図書堆裡より出でて銃剣を執るの身となれるもの数名ありたるなど、諸種の障礙に遭遇し」とあるを見ても良くわかる。洋書目録は菊版四百余頁、和漢書目録は三百余頁、前者は五十錢で、後者は五十八錢で塾外の人にも売られた。編者は田中監督指導の下、前者は谷河梅人が、後者は東野利孝が主となったが、鎌田塾長初め神戸寅次郎、青木徹二、福田徳三、向軍治の諸教授の注意と助力が完成のための大きな背景となった。こうした田中監督の精力的な仕事振りに対しても、何かと口をさしはさまないではない学生もある。三田評論の投書に「田舎の小娘が都の伯母から土産にもらった人形に衣服を着せたり、脱したり、あアでもなし、こうでもない」と日がな毎日いじくり廻して居るのと同様なのは、田中先生の図書館整理なり（中略）而して田中先生の是れが

整理に震襟をなやませ給うこと非常にて、夜の目も碌に合せ給はず、蔵書数次第に増加すると共に先生の体量は次第に減却しつつありと謂う。さても、さても「落葉生」という匿名だが、高橋誠一郎の手になったものだと後でわかった。面白がって擲^や擲^ゆしているような文章だが、それが却って田中監督の童稚な振りが活写されていて興味がある。かくして一連の改造が行われ、近代図書館としての型が整ってきた。他方、この頃には新しい図書館建設の議が熟し、建造の槌音も高らかに聞えてきて、煉瓦講堂から去る日も遠くなくなった。

ここで他の大学図書館の状況を一瞥しておこう。星文庫の委託によって慶應義塾図書館の蔵書も倍に増したが、それでも三万冊にすぎない。他の大学図書館はどうであらうか。幸い明治四十年十月に図書館雑誌が発行されて、各大学の比較が出来る。

蔵書冊数		館員数		計
東京帝国大学附属図書館 (館長 和田万吉)	三六四、二五二冊 (明治三九末)	館員一四、写字生三、出納手五 火夫一、小使三		二六名
早稲田大学附属図書館 (館長 市島謙吉)	一〇〇、〇一三冊 二六、七四七(委託) (明治四〇・八)	職員八、写字生六、閲覧小供五 給仕二、小使三		二四名
慶應義塾図書館 (監督 田中一貞)	三〇、〇四九冊 (明治四〇・三)	館員三、雇員三(この内訳は 給仕一(編者調べによる))		七名

東京帝大と早稲田においては図書館の建物が分離独立していたから、火夫小使などを数えた。慶應は煉瓦講堂の中で他の係と同居であったから純粹に図書館員だけの数である。それにしても非常な立遅れといわねばならぬ。

しかし四十年の文部省調査によると全国の官公私立図書館数は百七十館にすぎない。そのうち大学図書館は以上三

校の外には僅か京都帝国大学附属一を加えるのみである。他方東京市内の図書館は官立七、私立六の十三館で、図書館などの特種図書館が六、大学図書館が三、あとは学校図書館の学習院、それに公開の帝国図書館（官立）大橋図書館、南葵文庫（共に私立）で、公立日比谷図書館は建築中という、貧しい状態であった。